

中世の学問と禅僧の儒学講義

川本 慎自

1975年生まれ。東京大学文学部卒、同大学院人文社会系研究科修士課程修了。東京大学史料編纂所准教授。専門は日本中世史。

はじめに

「何のために学ぶのか」というのは、教育・研究の現場に身をおいている者ならばだれしも一度はたずねられたことのある問いではあるが、これに一言で答えられるほど現代社会は単純ではない。ただ、中世の人々が何のために学問をしていたのか、ということならば、いくつかの答えを用意することができるかもしれない。

中世の学問は、極端な言い方をすれば漢籍を学ぶことと同義である。もちろん、和歌など、「ひらがな」で学ぶようにみえるものもあるが、その背景に漢詩漢文の知識が必要なことは言うまでもない。中世の日本においては、中国伝来の文章や知識を身につけることが、「学ぶ」ということだったのである。ではなぜ中国のことを学ばなければならなかったのか、そのことを話の糸口に、少し考えてみたい。

漢籍珍重とあらたな儒学

日本の古代国家が中国の政治制度をモデルとしたことはあらためて言うまでもないことで、その運営のためには漢籍を学ばねばならなかつ

た。たとえば早く藤原京の時期には『論語』の一節を書いて練習した習書木簡がみえ^①、官人は大学寮などで漢籍を学ぶことによって出世の階段をのぼっていったのである。

このように漢籍を学ぶことが権力と結びついていた状況下では、「漢籍を所持すること」それ自体が価値をもつようになっていった。たとえば藤原道長が一条天皇に『文選』『白氏文集』を献上したり、平清盛が即位前の安徳天皇に『太平御覧』を献上したりしたことのようにより、贈答品、すなわち権勢を示す威信材として漢籍が意味をもつようになってゆくのである^②。もちろんこのように威信材化してゆくのは漢籍に限ったことではなく、書画や陶磁器など、「唐物」と呼ばれる中国伝来のあらゆる物品が贈答の対象となってゆくのであるが、こうした動向は鎌倉期までおよんでおり、安達泰盛を中心として漢籍を愛好するグループが形成され、それが鎌倉幕府内である種の派閥となってゆくという指摘もある^③。漢籍は、その重要さのあまり、学ぶものである以上に愛でるものになってしまっていたのである。

さて、こうした漢籍を取り巻く状況は、鎌倉時代の中盤以降、大きな変化を迎える。そのきっかけは、中国側での学問の変化であった。中国の学問の中心である儒学はもちろん古代から連綿と続くものであるが、宋代になって、朱熹

らの一派が儒学のあり方を大きく変えたのである。その変化は多岐におよぶが、一言でいえば典籍を細かな語句解釈ではなくもっと大きな内容で把握しようということであった。こうした儒学の新潮流は「宋学」と呼ばれる。

宋学においては、漢籍の解釈を大きく変えたことはもちろんであるが、そもそも典拠となるテキストの体系も大きく変えている。『論語』が引き続き中心的テキストであるのは変わらないが、そのほかに『大学』『中庸』を『礼記』から独立させて一書となし、また諸子百家の一人に過ぎなかった孟軻を「孔子にならぶ聖人(亜聖)」と位置づけ、その著作『孟子』をも称揚したのである④。これら『論語』『大学』『中庸』『孟子』は「四書」と呼ばれ、それまでの「五経」とならんであらたな儒学の基本的文献となってゆく。儒学のテキストとして「四書五経」という言い方をされることがあるが、その起点はここにあったのである。

宋学伝来と禅僧の「講義」

儒学の新潮流である宋学が中国で流行していたころ、日本でいえば鎌倉時代後半から南北朝時代にかけての時期は、ちょうど日本から中国へ禅僧の渡海がさかんになった時期でもあった。禅だけでなく中国文化に関するあらゆることを貪欲に吸収しようとした禅僧たちは、学問の最新の流行にも触れることになったのである。その結果、中巖円月、龍山徳見といった入元僧の帰国にともなって、これらの宋学も日本にもたらされることになる。

もちろん、禅僧たちは物体としての漢籍も持ち帰っており、たとえば中国の最新の木版技術で印刷された「宋版」や「元版」は幕府や朝廷の関係者の間でも威信財として珍重された。しかし、禅僧が本当の意味でもたらしたかったのは儒学の新潮流である。書物を珍重することは本意ではなく、豊かな内容理解こそが本質があった。宋学をよく理解した禅僧たちは、学んできた漢

籍の新たな解釈を伝えることを始めるようになる。これが漢籍の「講義」のはじまりとなる。

「漢籍を読むこと」自体は、古代から連綿と朝廷の博士家(清原氏・菅原氏など)でおこなわれてきた営みである。しかしそれは1対1で読みを伝授すること、つまりテキストの上に訓点をつけることが中心であった。それに対し、禅僧たちの「講義」は、講師が聴衆に対して語義や解釈を話すことが含まれており、多くの聴衆が一人の講師の話の聞くという、現代の授業にも通じるスタイルのものであった。これが南北朝時代以降に生まれてくるのである。

鎌倉末・南北朝期の禅宗寺院は、こうした漢籍の講義を「興禅の方便」として禅宗の拡大のために積極的に利用していた節がある。禅宗寺院では中国の最新の文化や学問に触れることができる、という点をアピールすることによって、とくに武士層への禅宗の浸透をはかっていたのである。「何のために学ぶのか」、中世の禅僧にとっては、みずからの教団の拡大のためといった側面もあったのである。

宋学であらたに「四書」に加えられた『孟子』には、いわゆる「易姓革命」の思想が含まれることはよく知られているが、『孟子』の思想はたとえば「太平記」の記述などにも端々に見受けられ、鎌倉末期の武家や公家のあいだではよく知られたものになっていた。したがって、「易姓革命」が鎌倉幕府を倒す思想的根拠になっていたのではないか、ということは、古くから指摘されているところである。禅僧が「興禅の方便」として宋学を武士たちに紹介したことは、結果として中世社会の展開にも大きな影響を与えることになっていった。

清原氏と宋学

禅宗寺院が儒学の新潮流である宋学を受容して講義を展開する一方で、古代より儒学を修めていた明経博士家の清原氏は、旧来の儒学(古注)を家説として墨守してきた。博士家の家説は、

単に家のなかで伝授されるというだけのものではなく、「施行」と呼ばれる朝廷の許可を経たものであり、天皇への進講や改元勘文の典拠として公式に用いられるものであった。禅僧らがあらたに伝えた宋学による新注、『孟子』や『大学』『中庸』などのあらたな儒書は、「施行」ではないので清原氏が扱うことはなかったのである。

室町期になり、前章でみたように禅僧たちが宋学の講義をさかんにおこない、武家を中心に広く浸透をはかるようになってくると、清原氏の側も宋学の新注を取り入れようとする動きが出てくることになる。しかし、古代から伝える家説を捨てて宋学に変更するというのは容易なことではなかった。そこで、室町中期の博士家当主である清原業忠は、清原氏の中興の祖である清原頼業(1122~89)と朱熹(1130~1200)が同世代の人物であることを利用し、「清原頼業が朱熹よりも先に『礼記』から『大学』『中庸』を抜き出して新たな家説を打ち出していた」という主張を始める。「最近禅僧がしきりに広めている宋学は、実は清原氏の先祖の方が先に言い出したことなのだ」というのである。

清原業忠(法名常忠)の孫にあたる宣賢は、業忠の講義でこの話を聞いたとしたうえで、「常忠此書ヲ講スル時、云出テ落涙セラレタソ」と記す^⑤。実は、清原業忠がこの逸話を語る時に涙を流したということは、ほかにも何人かの公家や禅僧が記している。彼らは必ずしも同じ時の講義を聴講したとは限らないので、「自分の先祖は偉大だった」と語り感極まって泣き崩れるというのは、業忠の定番講義だったのかも知れない。もちろん、この「朱熹よりも先に思いついた」というのは明らかに牽強附会なのであるが、清原氏はこの逸話によって「家説」として宋学を講ずることができるようになり、以後、儒学の講義は禅僧と清原氏の双方でおこなわれるようになってゆくのである。

抄物と知識

さて、これらの講義の内容を筆記したものが「抄物」と呼ばれる史料である。講師が講義準備のために用意した「手控え」と、聴衆が講義の場で聴いた内容を記録した「聞書」があるが、いわば「ノート」にあたるものである。とくに「聞書」の方は、講師が話したことをそのままにカタカナで記したものが多く、中世の口語を伝える資料として国語学で活用されてきた。しかし単に口語の様子を知るだけでなく、講義内容がそのまま記されているのであるから、中世の学問の様子をうかがう歴史学の史料としても貴重なものであろう。そこで、この抄物からみえる講義の実態を通して、中世人が何をどのように学んでいたのかを考えてみたい。

禅僧による漢籍の講義は、『論語』『孟子』などの四書だけでなく、漢詩集『三体詩』や史書『史記』『漢書』など様々なジャンルにおよんでいた。そのなかでも特異な地位を占めていたのが『周易』である。『周易』は『易経』とも呼ばれ、儒学のテキストである五経のひとつではあるが、むしろ卜筮のための書として知られている。日本の古代・中世においては、未来を知ることへの恐れから「易を学ぶと罰があたる」という禁忌意識があり、たとえば藤原頼長が保元の乱で敗死したのは易を学んでいたためであるとされるなど、とくに公家社会においては学ぶのが憚られるものであった。

しかし、禅僧はそうした禁忌意識からは比較的自由であった。東国の禅宗寺院では『周易』講義がさかんにおこなわれ、とくに足利学校は易学のひとつの拠点になるにおよんでいた。足利学校では、入門する者は僧形となり、学校内で与えられる「学徒名」を名乗ることによって、俗世間とは隔絶した一種の「アジュール」となっていた。したがって、易への禁忌を意識せずに学ぶことができたのである^⑥。

そこまでして易を学ばなければならなかった

のはどうしてなのか。もちろん、易それ自体が魅力的ではあったのだが、『周易』講義にはさまざまな知識が付随していた。『周易』は世界の事象を八卦、すなわち偶数と奇数の組合せで示されるパターンに分類して理解しようとするが、それはあらゆるものを数の組合せにおきかえることを意味する。ということは、『周易』を理解するためには計算をすることが必要となるのであり、講義のなかで算木の使い方などの計算の知識が伝授されることになる。実際に、室町期の相国寺僧・桃源瑞仙による『周易』講義を筆録した抄物『百衲襖』には、数十ページにわたって算木の使い方を図解した部分がある。

この計算の知識は、易学に留まることなく、年貢徴収や金融、土木など、経済活動に応用が可能なのは言うまでもない。こうした「講義」は、室町期以降、儒学知識の伝授という枠組みをこえて、様々な実用的な知識を伝える働きを担うことになってゆく。

もうひとつ例をあげれば、禅宗寺院でさかんにおこなわれた講義に『史記』の講義がある。『史記』列伝のなかに、扁鵲・倉公という中国古代の伝説的な医師の伝記がある。この「扁鵲・倉公伝」の部分は、室町期の禅僧、桃源瑞仙や月舟寿桂などが詳細に講義しているが、その講義は扁鵲と倉公がいかに治療をおこなったかということの説明することになり、様々な医書を引用して医学知識を解説することになる^⑦。桃源瑞仙による『史記』講義を筆録した『史記桃源抄』では、五蔵六腑の位置を図解した部分もみられる。こうした講義は医学の初歩知識を伝授する役割を果たすことになり、近世に至るまで医学を志す者はまずこの『史記』扁鵲・倉公伝を学ぶことが通例となってゆく。

このように、禅宗寺院の「講義」は、テキストの本筋を離れて、そこに付随的に含まれる様々な実用的な知識をも伝達する役割を担うことになり、それを求めて武家や公家が聴講するようになってゆくのである^⑧。

おわりに

ここまでみてきたように、鎌倉後期以降、禅僧によってもたらされた儒学の新潮流は、その思想内容が日本の中世社会に影響を与えたことももちろんであるが、それだけではなく、付随して計算や医術などの実用的な知識をも日本へもたらすこととなった。「中世人はなぜ学ぶのか」、少なくとも禅宗寺院の周辺では、そうした実用的知識を期待した側面もあったのであり、だからこそ禅僧の講義は武家や公家に広く聴講されたのである。

このち戦国期から近世初頭にかけて、徳川家康や直江兼続など、漢籍を愛好する武将が現れることはよく知られているが、これらはもはや威信財としての書物を愛でるのではなく、書物をひもとき、医術や兵法などの実用的知識を得ようとするものであった。そうした変化の背景には、南北朝から室町期にかけての禅僧の「講義」の積み重ねがあったのである。

- ① 東野治之「正倉院文書と木簡の研究」(塙書房、1977年)。
- ② 河添房江「唐物の文化史」(岩波書店、2014年)。
- ③ 福島金治「鎌倉中期の京・鎌倉の漢籍伝授とその媒介者」(『国立歴史民俗博物館研究報告』198、2015年)。
- ④ 福谷彬「南宋道学の展開」(京都大学学術出版会、2019年)。
- ⑤ 「大学抄」(京都大学附属図書館所蔵)。
- ⑥ 今泉淑夫「易の訓があたること」(安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』下、吉川弘文館、1989年)。
- ⑦ 田中尚子「室町の学問と知の継承」(勉誠出版、2017年)。
- ⑧ 川本慎自「中世禅宗の儒学学習と科学知識」(思文閣出版、2021年)。

(かわもと・しんじ/東京大学史料編纂所准教授)

研究分野の入門書

榎本渉「僧侶と海商たちの東シナ海」(講談社、2020年)
柳田征司「日本語の歴史4 抄物、広大な沃野」(武蔵野書院、2013年)